「日々の理科」（第 734 号） 2016（H28),-7,10

「オクラの実」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

「先生、ぼくのオクラの実、とってもいいの？」これも、この一週間、よく聞いたセリフだ。「もう少し待ってね。来週みんなで観察してからね・・・」これは、あまりよくない受け答えである。３年生のオクラは、「一人一鉢」なので、本来観察しようが、採取しようが、食べようが、個人の自由だ。「教師根性」とでも言うべき、余計な指示と言えるだろう。

「あ、ぼくのオクラにも、実がなった！」

花が終わるとしぼんだ花弁は、まとめて落ちる。ボールペンのキャップをはずすような感じだ。

翌日には、刺状の萼片もしおれて、実がふくらんでゆく。ここまでくると、子どもが見ても、花のつぼみとの区別がつくようになる。

更に翌日の状態。右下のものは、受粉に失敗して、枯れてしまった果実。オクラの実は、非常に急激に成長する。キュウリと同じで、オクラは果実が未熟な状態で収穫しないと、硬くなって食べられなくなる。しかし、このままにしておくのも面白い。完全に熟すと、茶色くカサカサになって、最終的に種子ができるのだ。「食べるか、種子か」子どもはどっちを選ぶだろう？